

複合動詞「～出る／～出す」の意味分析（一）

徐 民靜

0. はじめに

日本語の動詞には自他の対を成すものがあり、「出る」と「出す」をその例として挙げることができる。「芽が出る」の「出る」は自動詞であり、「友達に手紙を出す」の「出す」は他動詞である。しかし、これらの動詞が複合動詞の後項動詞になった場合、「出る」と「出す」の持つ自動性、他動性が必ずしも維持されているわけではない。「家を飛び出る」の「飛び出る」も「家を飛び出す」の「飛び出す」も自動詞文であり、同一の事態をあらわしている。このことは、「出る」と「出す」が複合動詞の形を取った場合「～出る」も「～出す」も、ともに自動詞文になるということであるが、ただ「～出す」は前項動詞によって他動詞文の形になる場合もある。

本稿（一）では、日本語のこのような自他性に焦点を当て、本動詞としては自他動詞のペアを成しているが、複合動詞の形になると自動詞文を取り、お互いに言い換えができるような場合について、詳しく考察する。

1. 先行研究

複合動詞「～出る／～出す」について研究された論文は数多くあるが、「～出る」と「～出す」の言い換えが可能な場合について言及されている論文には姫野（1977、1999）がある。姫野（1977、1999）では、複合動詞の前項部分の意味に注目して「外部に出る」という意味を含むものと含まないもの、接頭語等とに分類し、またそれらを「出る」を「出す」に言い換えられるものと言い換えられないものとのに分けている。姫野（1999）の分類表を、本稿（一）では次の【表1】として載せておく。

後項要素 前項要素	(a) 同一の文脈で「～で る」が「～だす」に言い換 えられるもの	(b) 言い換えられぬも の
(1) 「外部への移動」 の意を含むもの	湧きでる (=湧きだす) <u>溢れでる</u> 浮かびでる にじみでる ほとぼしり でる こぼれでる 漏れ でる 萌えでる	生まれでる 咲きでる 現れでる
(2) 「外部への移 動」の意を含まぬも の (移動の方法・様 相を示すもの)	這いでる (=這いだす) 転げでる 転がりでる 飛びでる 滑りでる 走りでる 漕ぎでる にじりでる <u>流れでる</u> しみでる 溶けでる ふきでる <u>突きでる</u> 迷いでる さ迷いでる 漂いでる 逃げでる 逃れでる <u>抜けでる</u> 忍びでる 浮かれでる	輝きでる 進みでる 捧げでる 歩みでる 泳ぎでる 踊りでる 暴れでる 舞いでる ひよろけでる よろば いでる ゆらぎでる ゆるぎでる 抜きんで る
(3) 接頭語等	はみでる (=はみだす)	おんでる さしでる

【表 1】 姫野 (1999) の表 (下線は筆者によるものである。)

姫野 (1977、1999) のこのような分類は、前項動詞の共通の意義素を見出すことで、大別したものであり、意味分類としては有効であると思われるが、【表 1】の (1) に該当する動詞について、「出現」そのものに重点があり、「後項の「でる」は単にそれを強調しているにすぎない。」¹とし、「見ると、岩

¹ 姫野 (1977 : 76) 引用

の裂け目から…清水が湧き出ているのである。²⁾」は「湧いているのである」と意味の上ではほとんど変わりがないと記述している。また、(1)の動詞は「込む」や「入る」とは結合しないと述べている。しかし、前項動詞を強調するための役割があるとはいえ、「でる」を「単に強調しているにすぎない」という記述には少し疑問が残る。次のような用例ではどうだろうか。

(1) 肝心のそばは、石臼挽(び)きの生粉打ち(100%そば粉)。水は白石神社にわき出る自然水を使う。(読売新聞 2005/02/11)

(2) 『なめとこ山の熊』は頭のからっぽな女子高生たちが芸能界での「仕事」に出かける話。いずれも、現代社会の風俗に浮かび出た、みじめたらしい泡のような現象に密着して、その情けなさをためつつがめつしている様子である。(読売新聞 2005/05/23)

(1)の「白石神社にわき出る自然水を使う」を「白石神社にわく自然水を使う」に置き換えてみた場合、「わき出る」が単に「わく」ことを強調しているにすぎないとしたら、「白石神社にわく自然水を使う」に違和感がないはずである。しかし、「わく」には「発生」の意味が強く、継続しているものには言いにくい。つまり、白石神社の自然水はただ「わいた(発生)」のではなく、自然水が継続して出ていることなので、「わき出る」と言わなければならない。このように、「わき出る」と「わく」には明らかな違いがあり、単なる強調ではないことが分かる。

(2)の用例も(1)の用例と同様に、「現代社会の風俗に浮かび出た、みじめたらしい泡のような」を「現代社会の風俗に浮かんだ、みじめたらしい泡のような」に置き換えることはできない。なぜならば、(2)の文は、ある社会現象が現代社会(現代人)が認識できる明確な形で現れたことを意味し、「浮かんだ」ではそういった意味をあらわすことができないからである。

(1)(2)の用例から、前項要素が「外部への移動」の意味を含む場合でも、姫野(1977、1999)の言う、単なる強調とは言えない場合があることが分

²⁾ 姫野(1977:76)の太宰治『走れメロス』の例。

かる。

姫野（1977、1999）では、【表1】の（2）に該当する動詞について、「出現」の意味は含まれず、主体の移動の方法や様相を示している。すなわち、前項動詞は「出る」を修飾していると言えよう。³と述べており、【表1】の（2）の動詞の大部分は反対方向の「込む」や「入る」とも結合すると記述している。本稿（一）の立場からも、「出現」そのものに重点が置かれているかどうかは分類基準の一つになるという点は賛成できるが、【表1】の（2）の動詞には「突き出る」、「抜け出る」とは言えても、「突き入る」、「抜け入る」とは言えないものがあり、「大部分」とは書かれているが、「～出る」としか言えない動詞があり、それらについての言及が必要である。

また、分析までには至らず、記述に終わっている、同一の意味内容で「でる」を「だす」に言い換えられる場合について、なお検討する余地がある。

本稿（一）では、姫野（1977、1999）の研究を踏まえ、「～出る」と「～出す」の言い換えが可能な場合には、どのような関係があり、どのような動詞の場合に可能なのか、さらに「～出す」が自動詞文の形であらわれるのはなぜか、について考察する。他動的事態が自動詞文の形であらわれるのは、日本語の特徴の一つであると捉える。

考察方法としては、姫野（1977、1999）の分類に従い、実際の用例を収集する形で行った。ただし、本稿（一）では特に「～出る」、「～出す」とともに比較的多くの用例が見つかった、「あふれー」「流れー」「突きー」「抜けー」を取り上げ、分析を行うことにする。

2. 基本義による「～出る」、「～出す」の分析

本稿（一）では、「～出る」と「～出す」の言い換えが可能な場合を考察の対象としているが、ここではそれぞれの基本義を定義し、複合動詞「～出る」、「～出す」にどのような形で基本義が影響しているのか、について述べる。

2. 1. 本動詞「出る」と複合動詞「～出る」

³ 姫野（1977：76）引用

「出る」の基本義について、宮島（1972）では「物体が他の物体から、または一定の範囲の空間から、外に移動することである。⁴」と述べている。宮島（1972）の定義を本稿（一）の立場から定義し直すと、「出る」の基本義は「ある空間からその空間の外へ動作対象が移動する」となり、以下この定義に従い、論を進めていくことにする。

「出る」：「ある空間からその空間の外へ動作対象が移動する」

本稿（一）の考察対象である「～出る」、すなわち、「出る」が複合動詞の後項に来る場合も「出る」の基本義に影響され、移動空間や動作対象は様々であるが、ある空間からその空間の外への移動を意味するという立場に立ち、以下の用例を見ていく。また「動作対象が出る」ことであるので、すべて自動詞文の形を取るということを確認する。

（3）1本のアコースティックギターから溢れ出てくる音色。

(News2u.net 2007/11/20)

（4）この時、舞台に立った子供たちの生き生きとした表情に目がくぎ付けになり、涙があふれ出た。

(毎日新聞 2007/12/03)

（5）こすったストローを蛇口から流れ出る水道水に近付けると「水道水は引き寄せられる」という生徒と、「離れる」という生徒に分かれてしまった。

(読売新聞 2006/07/11)

（6）フライパンにバターを溶かし、輪切りのリンゴを並べたらふたをして、リンゴから流れ出た汁がジュブジュブしてきたら火を止める。

(読売新聞 2006/02/09)

（3）の「あふれ出る」は、ギターの演奏者によって音が出されるわけだが、音を出す演奏者は文中からは消え、ギターそのものから「音が出る」ことが文にあらわれている。（4）は自分の中にあった「涙」が溜めきれず、自分の外

⁴ 宮島（1972：563）引用

側に「出た」という意味で捉えることができる。(5)の「ある空間」は「水道管」であり、水道管の外に「水道水」が「出た」ことであり、(6)は「リンゴ」から「リンゴの外へ」、「汁」が「出た」ことである。(3)～(6)の用例からは、動作対象である「音色」や「涙」、「水道水」、「リンゴ」すべてに意志性がないという共通点が見られる。

(7) 4つのヒレとワニのように突き出た鼻を持つ巨大なアシカのような動物で、専門家によると「海のティラノサウルス・レックス」に例えられるという。
(AFP BB News 2007/12/05)

(8) しかし、1週間ほど前に再び近くを通ると、割れたアスファルト舗装の部分から、白いダイコンの「頭」が見えていたという。今は長さ5センチほどが地面から突き出て、葉は約20センチまで伸びている。
(asahi.com 2007/12/04)

(7)(8)の「突き出る」は、頭の表面から外へ鼻が突き出ている状態⁵を言い、「あふれ出る、流れ出る、抜け出る」とは性格が異なる。本稿(一)では、出現を含む移動性のある「～出る」を取り上げているので、(7)(8)のような状態をあらわす「突き出る」は考察対象から割愛する。

(9) 東京・渋谷で行われた会見にはモデルのマリエさんが登場。漫画から抜け出てきたようなゴージャスさを見せて、商品のアピールに一役買っていた。
(フジサンケイ 2007/11/19)

(10) オシム監督は依然として集中治療室(ICU)に入っているが、この日は16日に入院してから初めて大きな検査を受けなかったという。田嶋専務理事は「1日に何度も検査をしなければならないところから抜け出たということが、ひとつのヤマを越えたということになるのかもしれない」と説明した。

⁵ 金田一(1976)によると、このような動詞を「ある状態を帯びることをあらわす動詞(第四種の動詞)」として分類している。「聳える、すぐれる、おもだつ、ずばぬける、ありふれる」などの動詞がこの分類に属する。

(9)は「漫画の中」から「漫画の外」へ「ゴージャスさ」が「出た」ことであり、(10)は「ある事態」から「その事態の外」へ「オシム監督」が「出た」ことである。(9)の動作対象は厳密に言うと「ゴージャスさ」であるが、文の意味内容から考えると、「(ゴージャスさな格好をしている)モデルのマリエさん」であり、(10)の動作対象は「オシム監督」である。つまり、「抜け出る」の動作対象は、意志性があると言える。

以上、(3)～(10)の用例から「出る」が複合動詞の後項動詞になっても、その複合動詞の意味に「出る」の基本義が影響を与えていることを確認した。もちろん、それぞれ前項動詞によって動詞全体の意味に違いが出てくるとは言うまでもない。

2. 2. 本動詞「出す」と複合動詞「～出す」

「出る」の基本義を「ある空間からその空間の外へ動作対象が移動する」と上述したが、それを基に「出す」の基本義を考えてみると、「ある空間からその空間の外へ動作主体が動作対象を移動させる」ということになる。

「出す」：「ある空間からその空間の外へ動作主体が動作対象を移動させる」

他動詞「出す」は前項動詞が自動詞の場合には自動詞、他動詞の場合には他動詞となり⁶、それぞれ自動詞文、または他動詞文の形を取る。以下の用例から確認する。

(11) 目頭からは、熱い涙があふれ出した。

(サンケイスポーツ 2007/11/19)

(12) その思いのあまり、あふれ出す感情を野手に向けてしまった。気迫の5回1失点(自責0)で3年連続の2ケタ勝利達成。

⁶ 「あふれる(自) + 出す(他) = あふれ出す(自)」
「突く(他) + 出す(他) = 突き出す(他)」

(11)の「あふれ出す」は、上の定義に従うと、「ある空間(目頭の奥)からその空間の外(目頭の外)へ動作主体が動作対象(涙)を移動させる」ということであり、(12)の「あふれ出す」も同様に考えることができる。しかし、「涙があふれ出す」を「目頭の奥から目頭の外へ動作主体が涙を移動させる」と解釈するには、動作主体と動作対象はあまりにも近接している。すなわち、(11)(12)の動作対象「涙」や「感情」は動作主体の一部であるため、動作主体は動作対象と同一のものであるとも言えるからである。

(13)パリッとした春巻きの皮とトロリと流れ出す半熟卵の対比、半生状態の紫タマネギとツナの食感の違い。(読売新聞 2007/05/31)

(14)「仕事に達成感がない」などの悩みも重なり、通勤中の電車で急に涙が流れ出した。(読売新聞 2007/11/14)

(13)の「流れ出す」は(11)(12)のように「ある空間からその空間の外へ動作主体が動作対象を移動させる」というように考えることはできない。なぜならば、動作対象である「半熟卵」に動作主体が力を与え、ある空間の外へ半熟卵を出している、というような、動作主体が別に存在しているかのように考えにくいからである。つまり、「流れ出す半熟卵」は、極めて自発的であり、自動詞的であると言える。(14)の「流れ出した」は二つの意味で捉えることができる。一つは、「ある空間(体)からその空間の外(体の外)へ動作主体が動作対象(涙)を移動させる」という場合と、もう一つは「～だす」が開始のアスペクトを意味する場合である。「～だす」が開始の意味をあらわす場合はすでに「出る／出す」の持つ「ものの移動」の意味はなく、補助動詞としての役割を担う。「流れ出した」を開始のアスペクトで捉えた場合は、「流れ出た」と言い換えることはできない。なぜならば、開始の「～だす」はすでに形式化していて、「出る」と「出す」の対応が成り立たないからである。

それ故に、開始アスペクトの「～だす」も本稿（一）の考察対象からは除外する。⁷

（１５）三角形に突き出した城ヶ崎は船のへさきにそっくり。

（読売新聞 2005/10/01）

（１６）「生徒を警察に突き出すことは教育者として出来ない」。これが、
今も教師の多くが抱いている考え方ようだ。

（読売新聞 2006/12/20）

（１５）の「突き出す」は（７）の「突き出る」と同じように、移動性がなく、状態性が強い。このように状態性の強い「突き出す」は自然発生的で極めて自動的と言える。（１６）の「突き出す」は本稿（一）で定義した「出す」の基本義「ある空間からその空間の外へ動作主体が動作対象を移動させる」に従って解釈することができる。つまり、「ある空間（学校）からその空間の外（警察）に動作主体（先生）が動作対象（生徒）を移動させる（突き出す）」ことであり、動作主体は「何かを」移動させるので、「動作対象を～」が必ず必要であり、他動的であると言える。

（１７）満員電車で揺られる会社勤めを終えた後は、マンションを抜け出して広々した田舎で暮らしたいと考えるようになっていた。

（読売新聞 2007/11/30）

（１８）太る悪循環から抜け出すため、今までもダンベルや筋トレ用品など、様々な道具を試してみた。

（読売新聞 2005/11/24）

（１７）（１８）の「抜け出す」は「あふれ出す」や「流れ出す」と違い、動作主体と動作対象が同一である。「抜け出す」を他動的観点から見ると、（１７）「マンションからその外へ自分が自分を出す」、（１８）「悪循環からその外へ自分が自分を出す」と考えることができ、動作対象（＝動作主体）

⁷ （二）において改めて取り上げる。

は自分自身であり、意志性がある。ここで、「自分が自分を出す」ということは、「自分を積極的にある空間から出す」ことであると考えられる。

2. 3. まとめ

以上、複合動詞の後項動詞の基本義を定義し、その基本義に従って複合動詞の「あふれ出る／あふれ出す」「流れ出る／流れ出す」「突き出る／突き出す」「抜け出る／抜け出す」意味を分析してみた。その結果、「～出る」の用例(3)～(10)は「出る」が後項動詞になっても自動性がそのまま意味に反映されていることが確認できた。「～出す」の用例(11)～(14)は、動作対象に意志性がなく、(17)(18)は、事態として「自分自身を出す」という意味で意志性がある。(16)の「突き出す」は「出す」の他動性がそのまま反映されている唯一の他動詞文である。

3. 複合動詞「～出る」「～出す」の言い換え

ここからは、前に挙げた用例のうち、「～出る」と「～出す」の言い換え可能な場合に焦点を当てて見ていく。

3. 1. 「あふれー」

(3) 1本のアコースティックギターから溢れ出てくる(=溢れ出してくる)音色。

(4) この時、舞台に立った子供たちの生き生きとした表情に目がくぎ付けになり、涙があふれ出た(=あふれ出した)。

(11) 目頭からは、熱い涙があふれ出した(=あふれ出た)。

(12) その思いのあまり、あふれ出す(=あふれ出る)感情を野手に向けてしまった。

上記の用例について「あふれ出る」と「あふれ出す」の言い換えを行って見たが、本稿(一)の用例からは言い換えが全て可能である。ただし、「あふれ出る」と「あふれ出す」の言い換えが可能ではあるが、意味内容が同一だとい

うことではない。次の（１９）のような例はどうだろうか。

- （１９）５人とも個性があふれ出ていて(*あふれ出^していて)気持ちがいい。
（毎日新聞 2007/04/05）

（１９）は「（作品に）個性があふれ出ていて」ということであり、「（作品に）個性があふれ出していて」とは言い換えることはできない。「個性があふれ出していて」というと、作家の個性ではなく、個性自体が働いて、個性が作家から切れてしまう。つまり、その作家自身の個性が作品から感じられるということなのに、作家の意志性が感じられないので、非文になる。さらに、「作品に」という出る空間の認識が作用し、「あふれ出ている」は「作家の個性が（自然と作品に）出ている」という自動詞文として解釈できる。つまり、（１９）の「あふれ出る」を「あふれ出す」に置き換えると、他動的意味が働き、「個性自身が何かを出している」という意味になってしまうので、（１９）の場合は、言い換えが不可能である。

3. 2. 「流れー」

- （５）こすったストローを蛇口から流れ出る（＝流れ出^す）水道水に近付くと「水道水は引き寄せられる」という生徒と、「離れる」という生徒に分かれてしまった。
- （６）フライパンにバターを溶かし、輪切りのリンゴを並べたらふたをして、リンゴから流れ出た（＝流れ出^{した}）汁がジュブジュブしてきたら火を止める。
- （１３）パリッとした春巻きの皮とトロリと流れ出す（＝流れ出^る）半熟卵の対比、半生状態の紫タマネギとツナの食感の違い。

（５）（６）（１３）の「流れ出る」と「流れ出す」は言い換えが可能ではあるが、「あふれー」の場合と同様に意味内容が同一ではない。次の用例はどうだろうか。

(20) 「竹酢を加えると、豚肉特有のにおいが消え、保水力がアップし、肉汁が流れ出ない(?流れ出さない)効果があるんです」と生産者の木島敏昭さん(57)。(読売新聞 2007/03/17)

(21) 雨水がいききに川に流れ出さない(?流れ出ない)ように一時ためておく下水道の施設。(東京都都市整備局)

(20) (21)は「流れ出る／流れ出す」が否定の形を取った場合だが、言い換えると非文ではないが、文の意図が伝わらない場合があった。(20)の「肉汁が流れ出ない効果」が「肉汁が流れ出さない効果」となると違和感があるのは、(20)は肉汁が肉から出てしまうこと、すなわち、移動を抑制することが文の意図であり、それが認知されているからである。(21)の「雨水が流れ出さないように」が「雨水が流れ出ないように」となると、雨水を貯めておくことの必要性が感じられない。というのは、「雨水が流れ出ないように」には「雨水が自然に流れ出ることがないように」という意味でしか取れないからである。

3. 3. 「突きー」

(8) 今は長さ5センチほどが地面から突き出て(=突き出して)、葉は20センチまで伸びている。

(16) 「生徒を警察に突き出す(*突き出る)ことは教育者として出来ない」。これが、今も教師の多くが抱いている考え方のようだ。

(8)は「突き出る」と「突き出す」の言い換えが可能だが、(16)は不可能である。(16)の「突き出す」は「動作主体が動作対象を移動させる」という意味を持つので、動作対象に働きかける動作主体が明確でなければならないが、「突き出る」には、動作対象に働きかける動作主体が明確にあらわれないため、「突き出る」と言い換えはできず、自動詞文にはできないのである。

3. 4. 「抜けー」

(9) 東京・渋谷で行われた会見にはモデルのマリエさんが登場。漫画から抜け出てきた(=抜け出してきた)ようなゴージャスさを見せて、商品のアピールに一役買っていた。

(10) オシム監督は依然として集中治療室(ICU)に入っているが、この日は16日に入院してから初めて大きな検査を受けなかったという。田嶋専務理事は「1日に何度も検査をしなければならないところから抜け出た(=抜け出した)ということが、ひとつのヤマを越えたということになるのかもしれない」と説明した。

(17) 満員電車で揺られる会社勤めを終えた後は、マンションを抜け出して(*抜け出て)広々した田舎で暮らしたいと考えるようになっていた。

(18) 太る悪循環から抜け出す(*抜け出る)ため、今までもダンベルや筋トレ用品など、様々な道具を試してみた。

(9) (10) (17) (18)は「抜け出る」と「抜け出す」の言い換えが可能な場合と可能でない場合がある。(9)は「漫画から{抜け出てきた}ような{ゴージャスさ}を持ったマリエさんが登場」という意味であり、「漫画で見るようなゴージャスさ」が「抜け出てきた」で、「ゴージャスさ」が「漫画を抜け出す」とは考えにくい。しかし、「ゴージャスさ」には意志性がないが、ゴージャスなマリエさんには意志性があり、「抜け出る」も「抜け出す」も可能である。(10)の場合は、動作対象に意志性がある点は(9)と同じであり、「抜け出た」を「抜け出した」と言い換えできる。しかし、文脈から解釈すると、「あるところからオシム監督が自分の意志で抜け出した」という意味ではなく、「一つの通過点としてあるところから抜け出た」という意味であるため、最も適切なのは「抜け出た」である。(17) (18)も(10)と同様に動作対象が意志性のあるものであり、「抜け出る」ことも「抜け出す」ことも可能だが、(10)とは逆に動作対象の意志が強くあらわれている。(17)は「マンション暮らしからの脱出」、(18)は「悪循環からの脱出」を

意味し、「抜け出た」では動作対象（＝動作主体）の強い意志での移動は感じられない。

（２１）ＪＲ西は『利益は遠慮がちに』というくらいの思いでないと、これまでの過剰な収益・効率主義から抜け出せない（*抜け出られない）」と強調する。
（読売新聞 2006/04/18）

（２２）（トヨタの北米市場への）依存体質から抜け出しつつある（*抜け出つつある）とはいえ、稼ぎ頭はいまだ北米だ。その市場に変調が見えている。
（読売新聞 2007/11/08）

（２１）（２２）は「ＪＲ西」や「トヨタ」という組織が動作対象であるが、ある組織というものに対する意志性の有無の判断は、組織を構成しているものの意志性の有無と直結する。つまり、ある組織には、組織を動かす構成員が存在し、その構成員には意志性があり、組織に意志性を持たせる。となると、「ＪＲ西」や「トヨタ」は意志性のある動作対象ということになる。「ＪＲ西」や「トヨタ」は「抜け出る」と「抜け出す」の言い換えが可能だが、（２１）の「抜け出せない」は「抜け出られない」とは言えない。つまり、「抜け出る」は「可能形式」であらわれることが難しいと考えられるが、その理由は「抜け出る」には動作対象の強い意志性が感じられず、そのため可能形式を取ることにも難しいと判断されるからである。（２２）の「～つつある」はある動作が進行中であることをあらわし、「トヨタは（徐々に）依存体質から抜け出している」という解釈ができるが、「抜け出る」にはやはり意志性が感じられないため、進行中であることをあらわしにくい。「抜け出ている」という場合も、結果の状態をあらわし、進行中である意味ではない⁸。

以上のように「抜け出る」と「抜け出す」には「動作対象の意志性の有無」ということが大きく作用していると考えられる。

⁸ 金田一（1976:22～23）に「継続動詞には他動詞が多く、瞬間動詞には自動詞が多い、と見られるが、この傾向を反映してか、自動詞の方は瞬間動詞に属する、と見られるものが少なからず存することは興味あることと思う。」と述べられており、その例として「きめる」は継続動詞であるが、「きまる」は瞬間動詞であるとしている。

4. おわりに（まとめ）

本稿（一）では、①本動詞「出る／出す」と複合動詞「～出る／～出す」との意味上の関係、②「～出る」と「～出す」の言い換えについて、可能な場合には、どのような関係があり、どのような場合に可能なのか、③「～出す」が自動詞文の形であられるのはなぜか、について明らかにするため、具体的事例として次の「あふれ出る／あふれ出す」「流れ出る／流れ出す」「突き出る／突き出す」「抜け出る／抜け出す」を取り上げ、考察を進めた。その結果、次のような結論を出すことができた。

①本動詞と複合動詞との関係

「～出る」の場合、基本義が複合動詞の意味にも影響を与えていた。ただし、「突き出る」には、移動性が弱く、状態性が強いため、本稿（一）の考察対象からは除外した。「～出す」の場合、基本義が複合動詞にも影響を与えてはいるが、「突き出す」のみであった。「突き出す」以外の複合動詞は、他動詞ではなく、自動詞であった。ただし、「突き出る」と同様に状態性の強い自動詞「突き出す」は本稿（一）の考察対象からは除外した。

②「～出る」と「～出す」の言い換え

ほとんどの場合に言い換えが可能ではあったが、言い換えた文の意味が同一ではなかった。もっと厳密に言うと、ほとんどの場合に言い換えられないとも言える。言い換えが可能かどうかには個別的に、動作対象の意志性の有無、否定形式、可能形式、進行（継続）などの問題があった。

③「～出す」が自動詞文の形であられるのはなぜか

本稿（一）は、本動詞の基本義から複合動詞の意味を探り、他動詞である「出す」が複合動詞の後項にくる場合、なぜ他動詞にならないのかが、疑問の一つであった。「～出る／～出す」の結合形式の自他性は、自動詞と他動詞が結合すると、自動詞になり、前項部分に他動詞がくる場合のみ他動詞になる（例えば、突き出す）ことが分かったが、「突き出す」以外の複合動詞はなぜ自動詞になるのかについては明らかにできなかった。

今回の考察の過程で、「～出る／～出す」の動作対象の意志性が動詞の自他性に大きく作用していることが明らかになったが、まだ解明できていない部分

もある。前項動詞が他動詞の場合「～出る」と「～出す」が、ともに付く場合とどちらか片方にしか付かない場合があり、これらについて詳しく考察することが、今回明らかにできなかった部分の解明につながると考えられるため、引き続き次の論文で考察を進めることにする。

<用例検索>

YOMIURI ONLINE <http://www.yomiuri.co.jp/index.htm>

YAHOO! JAPAN 検索 <http://search.yahoo.co.jp/>

Google 日本 (ニュース検索) <http://www.google.co.jp/>

<参考文献>

金田一春彦 (1976) 「国語動詞の一分類」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

国立国語研究所・宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

姫野昌子 (1977) 「複合動詞『～でる』と『～だす』」『日本語学校論集』4号、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校

〃 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

(龍谷大学大学院研究生)